

〈原著〉

特別支援学級における学生ボランティア導入に関する調査研究 (1)

今野 邦彦 (藤女子大学 人間生活学部 保育学科)

藤女子大学の学生ボランティア派遣の実際の事例を踏まえ、小中学校の特別支援学級における学生ボランティア導入の成果と課題について考察した。

その結果、ボランティア導入の成果として共通しているのは、普段よりもきめ細かい対応や指導ができたという点であった。また特別支援学級は全員が支援を必要とする児童生徒のため、通常学級の場合と異なり、ボランティア学生はどの子どもにも平均的に関わり、配置や役割についても臨機応変に対応することが求められた。

導入に関する課題で共通しているのは、打ち合わせや連携など、体制に関わる部分であった。一方、特別支援学級に特徴的な課題として、児童生徒の慣れや落ち着きの問題が指摘されたことから、学級の規模やニーズに応じた適切な人員配置が必要であることが示唆された。

キーワード：特別支援教育、特別支援学級、学生ボランティア

1. はじめに

特別支援教育の推進は2007年の学校教育法等の改正によって法律上明確に規定され、現在もその充実に向けて体制整備が進められている。

大石¹⁾は「特別支援教育体制の整備に向けて取り組もうとする時の課題として、①人的・物的条件の整備、②きめ細かな対応を行ううえでの時間の確保、③より良い教育実践を生み出す教員・学校のバックアップ体制の脆弱さなどを挙げることができる」とし、さらに「これらの問題を包括的に解決する方策として、大学等高等教育機関に学ぶ大学生をマンパワーとして期待し、インターンとして学校現場に受け入れ、これを活用することは、確かに考える一つの選択肢となるであろう」と述べている。

実際に文部科学省²⁾は、「特別支援教育関係ボランティア活用事例集」の中で、全国の教育委員会担当者が、特別支援教育の体制整備について支援に直接携わる人材の不足を指摘していることや、この人材確保について多くの自治体が工夫を凝らしており、ボランティアの活用も全国的に広がっていることを報告している。この事例集の中では、大学生や大学院生のボランティアを活用した事例が数多く紹介されており、特別支援教育の充実のための一つの大きな要素がマンパ

ワーの確保であり、その手段として学生ボランティアの活用が注目されていることを裏付けている。

また特別支援教育における学生ボランティアに関する研究には、根津³⁾、宮下ら⁴⁾、野澤⁵⁾、寺田ら⁶⁾、黒住ら⁷⁾、山本ら⁸⁾、五十嵐ら⁹⁾、山本^{10),11),12)}、染谷¹³⁾、などがある。

しかし前述の事例集においてもこれらの研究においても、支援の対象となっているのはほとんどが通常学級において特別な支援を必要とする児童生徒、すなわち通常学級に在籍していてLD(学習障害)、ADHD(注意欠陥多動性障害)、高機能自閉症等を含んだ障害のある児童生徒であり、特別支援学級の児童生徒への関わりを検討したものは少なく、特に特別支援学級のみの特化した支援をとり上げたものは見当たらない。

そこで本稿では、藤女子大学(以下、本学)の学生ボランティア派遣の実際の事例を踏まえ、小中学校の特別支援学級における学生ボランティア導入の成果と課題について考察することを目的とする。

2. 学生ボランティアの導入

今野ら¹⁴⁾は、石狩市にある藤女子大学人間生活学部保育学科の学生が石狩市の特別支援教育にどのように貢献できるのかを探るべく、特別支援学級設置校を対

象に調査を行った。その結果、小中学校の特別支援学級における学生ボランティア活用の可能性として、授業中、休み時間、放課後、学校行事などの場面が考えられ、そのニーズがあることが明らかになった。また課題としては、学生の時間調整・日程調整、対象校までの交通機関、予算などがあげられた。

本学では、この調査研究の結果にもとづき、2014年4月から石狩市内小学校・中学校の特別支援学級における学生ボランティア派遣の活動を開始した。

前年度の調査ではボランティアを「利用したい」もしくは「これから利用するかどうかを検討したい」と回答した学校が9校であったが、新年度になってからの種々の調整の結果、このうち6校（小学校4校・中学校2校）でボランティア活動を実施することとなった。

ボランティア活動は、大学の授業期間に合わせて、前期は5月から7月、後期は10月から12月（一部の学校は1月まで）の期間で実施した。原則として学生は一人当たり週1回、同じ学校で、同じ曜日と時間帯にボランティア活動を行った。学生は前期と後期では別の学生であり、通年で参加した学生はいなかった。時間帯はほとんどが午前中で、1回の活動時間は平均3時間程度であった。

年間を通しての各学校でのボランティア実施状況は表1のとおりであった。

学生一人当たりの平均活動回数は5.4回であり、最も多い学生は10回、最も少ない学生は2回であった。

毎回のボランティア活動後、学生は大学に報告書を提出し、活動内容と感想を報告した。活動内容を、文部科学省の特別支援教育関係ボランティア活用事例集を参考に8分野に分類したところ、結果（複数回答）は表2のとおりであった。

活動内容は「教員が授業を進める際の補助」が最も多く、具体的には「国語・算数のプリント学習の支援」「作文指導の補助」「書道の支援」「パソコンの使い方の支援」「楽器演奏の支援」「図工の制作の支援」「体力づくりの伴走」「体育の道具の準備」「体力測定の補助」

表1 特別支援学級ボランティア年間実施状況

学校名	実人数	延べ回数
A小学校	16	73
B小学校	13	82
C小学校	8	53
D小学校	10	19
E中学校	6	52
F中学校	6	40
合計	59	319

表2 ボランティア活動内容（複数回答）

	延べ回数	割合(%)
教員が授業を進める際の補助	251	38.3
休み時間などの遊び相手	191	29.2
安全確保のための見守り	71	10.9
生活面での支援	58	8.9
行事支援	22	3.4
車いす、移動などの介護	8	1.2
放課後支援	0	0
その他	53	8.1
計	654	100

「スキー学習の補助」「畑作業の支援」「通常学級との交流授業での補助」「試験監督の補助」など、多種多様なかたちでのサポートが行われた。

「休み時間などの遊び相手」では、遊びの内容が多数挙げられていた。具体的には「鬼ごっこ」「トランプ」「カードゲーム」「ボードゲーム」「将棋」「オセロ」「パズル」「ブロック遊び」「ボウリング」「卓球」「サッカー」「ドッジボール」「キャッチボール」「バスケットボール」「ピアノ演奏」などである。

「安全確保のための見守り」では、「包丁を使う時」「彫刻刀を使う時」「校外学習での歩行」「プール学習」という場面での児童生徒の安全を確保するための活動が行われていた。

「生活面での支援」では、「排泄の支援」「水分補給の支援」「衣服の着替えの支援」「清掃活動の支援」など、授業時間以外での日常生活に関する支援が行われていた。

「行事支援」では、運動会、体育大会、学習発表会、小学校と中学校の交流会などの行事について、練習や当日の支援、用具係の補助などの活動が行われた。

「車いす、移動などの介護」では、「車いす移動の補助」「肢体不自由児の転倒予防」といった回答が見られた。

「放課後支援」は授業時間終了後に学校に残る児童生徒の支援である。今回は計画はされたものの、学生の都合が合わず実施には至らなかった。

「その他」はボランティア開始前の「オリエンテーション」が主な内容であるが、ある小学校ではボランティア学生がメインティーチャーとなって授業を進める「模擬授業」の機会を与えていただいた。

3. 調査

前項で紹介したボランティア活動について、派遣先の特別支援学級の教員に質問紙調査を実施した。

(1) 目的

特別支援学級における学生ボランティア導入の成果と課題を明らかにする。

(2) 方法

ボランティア実施校を対象に、前期終了時と後期終了時に質問紙調査を行った。

調査内容は、学生ボランティア導入の成果については、特別支援教育関係ボランティア活用事例集を参考に8項目に分け、複数回答も可能として回答を求め、記述欄も設けた。

学生ボランティア導入の課題についても、同様にボランティア活用事例集を参考に8項目で複数回答可能とし、各項目で具体例の記入を依頼した。

(3) 結果と考察

ボランティア活動を実施した全6校から回答があった。当初は各学校の代表者1名による回答を予定していたが、複数の教員から回答がある学校もあり、これらをすべて有効回答とした。その結果、回答数は計16名となった。

導入の成果についての回答数と自由記述を表3、表4に示す。

学生ボランティア派遣先の学校の教員が、導入の成果としてあげた項目の中で最も多かったのは「児童生徒の遊び・集団参加の促進」であり、次いで「児童生徒の授業態度・情緒の安定」「児童生徒の安全確保」「学級の活性化」「児童生徒の学習面の向上」「児童生徒の日常生活面の向上」の順であった。

表2の活動内容では授業中の補助活動という回答が多かったことから、成果として「児童生徒の学習面の

向上」が多く挙がるかと思われたが、教員は授業の場面であっても、学習内容の指導そのものより児童生徒の授業態度の向上や情緒の安定にボランティアの導入意義を実感していることが多いことが示唆された。

また、遊び、集団参加、学級の活性化などの項目についても多くの教員が成果を感じていた。実際にも遊びでの関わりは授業場面に続いて多く、ボランティア活動の大きな位置を占めていることがわかった。特に今回のボランティア実施校の中には児童生徒数が2名という小規模特別支援学級があり、ここでは学生ボランティアが集団活動に及ぼす成果が大きかったと考えられる。

少ないながら「学生の成長への貢献」という回答もあった。これは前述の模擬授業をはじめ、ボランティア活動が学生側にもメリットがあるものであると教員が感じていたことを示している。

自由記述の内容は学生の態度や関わり方に関するものもあったが、ボランティアの導入によって、普段できない対応ができたことや、よりきめ細かい指導ができたことを成果としてあげるコメントがあった。

ボランティア導入の課題についての回答数と自由記述を表5、表6に示す。なお、表6の丸数字は表5の丸数字の項目に対応している。

導入に関する課題として挙げられたのは多い順に「事故が起きた場合の補償が心配」「児童生徒がなじみづらい、落ち着かないなど」「ボランティアの時間・回数・期間などの調整が難しい」「経費」「学生への指示や打ち合わせに時間がとられる」などであった。

自由記述の内容をみると、「事故が起きた場合の補償が心配」の項目では、学校でのボランティア活動中の事故の懸念はもちろんだが、行き帰りの事故について心配する声もあった。ボランティア活動に参加する学生は全員ボランティア保険への加入が義務付けられており、小中学校側にもこのことは伝えてあるが、それでもなおボランティア活動に関する最大の懸案事項は事故とその補償の問題であることが明らかになった。ボランティアの学生も受け入れる学校側も安心して充実した活動ができるような体制作りが大きな課題であろう。

「児童生徒がなじみづらい、落ち着かないなど」については、学校や児童生徒の実態によっても大きく異なる

表3 学生ボランティア導入の成果

	回答数
児童生徒の遊び・集団参加の促進	12
児童生徒の授業態度・情緒の安定	10
児童生徒の安全確保	8
学級の活性化	7
児童生徒の学習面の向上	6
児童生徒の日常生活面の向上	5
学生の成長への貢献	2
その他	1

表4 成果に関する自由記述 (抜粋)

- ・最初はどう動いたらよいかわからなかったが、後半は進んで関わってくれたので助かった。
- ・最初の頃は学生の役割が不明確だったが、回数を重ねるごとに役割がわかるようになってきてよかった。
- ・曜日・時間を固定して来てもらったので、その曜日は普段対応できないところまで対応ができた。
- ・学生ボランティアさんに来ていただいて、子どもたちをきめ細かく指導することができた。

表5 学生ボランティア導入の課題（複数回答）

	回答数
①事故が起きた場合の補償が心配	8
②児童生徒がなじみづらい、落ち着かないなど	4
③ボランティアの時間・回数・期間などの調整が難しい	3
④経費（例：調理学習の材料費など）	3
⑤学生への指示や打ち合わせに時間がとられる	2
⑥学生の能力不足・態度が悪い	1
⑦個人情報の保護が心配	0
⑧その他	5

表6 課題に関する自由記述（抜粋）

- ①休み時間、外遊びや体育館で一緒に遊んでもらう時、ケガなどが心配。
 ①移動時や校内で事故が起こってしまった時の対応。
 ①冬場の悪天候の際、交通手段の面で心配だった。
 ①自転車で来てもらう際、途中の事故が心配。
 ②情緒の安定しにくい子どものため、慣れるまでにはどうしても学級が落ち着かなくなる。
 ②学生の人数が多すぎると落ち着かない。固定したメンバーが継続してきてもらえるとありがたい。
 ③できれば学校の日課に合わせて来てほしい。
 ③曜日によって人数を均等にわけてもらえるとよい。
 ④給食を一緒に食べてもらいたいが、実費がかかってしまう。
 ⑤帰る時の挨拶や打ち合わせ等で、教師が学級を空けなくてはいけなくなることがある。
 ⑥もっと積極的にかかわってもらえると助かる。
 ⑥来校の際の服装がややふさわしくないことがあったが、改善された。
 ⑧もう少し長期間いてくれると、子どもも学生も慣れて、やることがわかってくると思う。
 ⑧学生側としてこのボランティアにどう取り組みたいと考えているのかなど互いに目的を確認しあい、意義のあるものにしていきたい。
 ⑧臨時休校などの際の学生への連絡手段が課題。

るが、まずは実態に応じた適正規模の人数を派遣するという配慮が大学側に求められる。学生の希望者全員を派遣するだけでなく、ある程度選考をするという方法をとる必要もでてくるだろう。児童生徒が慣れるまでに時間がかかるという点については、「⑧その他」の自由記述にもあるように、もっと長期間の派遣が可能になれば改善が望める場合もあるだろう。

「ボランティアの時間・回数・期間などの調整が難しい」「経費」「学生への指示や打ち合わせに時間がとられる」については、体制の整備、手続きの明確化など、大学と小中学校両者の努力によってある程度の改善が見込まれる項目である。ただし、交通費に関しては、今のところ一切補助がなく学生の自費で賄っており、財源の確保が大きな課題である。

4. まとめと今後の課題

特別支援教育における学生ボランティアに関する研究は前述の通り多数みられるが、そのほとんどは通常学級において支援を必要とする児童生徒への関わりの調査や事例研究である。

寺田ら⁹⁾はボランティア導入に伴う成果の調査を行い、教職員の声として「一日の中で気づけなかった子どもの変化を知ることができる」「支援を受けている児童が自信を持てるようになってきた」などという評価がある一方、「打ち合わせの時間がなかなかとれない」「具体的な支援のあり方を伝えることができない」などという記述があることを指摘している。また五十嵐ら⁹⁾の研究では、通常学級において個別の対応が必要な児童生徒にボランティアが支援をすることにより、学級担任または教科担任は個別対応の回数が減り、そのぶん学級全体の授業や指導がスムーズになることを示唆している。課題としては、大学と受け入れ先の学校の連携や情報共有が不十分であることを挙げている。

山本ら⁸⁾もボランティア派遣校の教員に調査を行い、①教室に支援の手と目が増えた、②教師とは異なった視点からの子どもの観察が支援のヒントになったなどの成果があったとしている。しかし課題として、①毎年、一定人数を確保する必要があること、②ボランティア学生の質的向上を図ることなどを挙げている。

これらの研究と今回の調査結果を比較した場合、ボ

ボランティア導入の成果として共通しているのは、児童生徒に対し普段よりもきめ細かい対応や指導ができたという点である。これは人数の増加を活用するという意味で直接的な効果ということができよう。ただ、通常学級においてはボランティア学生が支援を必要とする特定の児童生徒につき、学級担任等が全体指導をするという構図が一般的であるが、特別支援学級ではそのような方法をとったという回答はなかった。すなわち特別支援学級は全員が支援を必要とする児童生徒のため、ボランティア学生はどの子どもにも平均的に関わり、人員配置や役割についても臨機応変に対応することが求められたと考えられる。

また、活動内容を比較した場合、通常学級・特別支援学級ともに授業の補助に対するニーズが最も多いのは共通しているが、特別支援学級では児童生徒の遊び相手や見守り役としての活動の重要性も高いことが考えられる。また、排泄・水分補給・着替えの支援や車いす移動の補助など、通常学級ではほとんど行われないう活動もあり、活動内容の多様性が特徴となっている。

ボランティア導入に関する課題で共通しているのは、打ち合わせや連携など、体制に関わる部分であった。これは指摘されている「ボランティア学生の質の向上」に直結する問題であり、それぞれの地域、大学、学生、小中学校、児童生徒の実態に応じて早急に整備すべきものである。一方、特別支援学級に特徴的な課題と考えられたのが、「学級が落ち着かなくなる」「児童生徒が学生に慣れるのに時間がかかる」という問題であった。これも学級の規模や児童生徒の実態によって変わるものであり、小規模の学級ではこのような問題の指摘はなく、むしろその場の人数が増えることを歓迎する回答がみられた。いずれにしても、学級のニーズに応じた適切な人員配置が必要であろう。

最後に石狩市における特別支援学級ボランティア学生派遣事業についての今後の課題であるが、本事業は今回が初年度であったため、まだまだ課題が山積している。初年度の結果として特有の課題として考えられるのは、現場での事故に対する不安が払拭できていないこと、学生の目的意識が明確でない場合があること、予算の裏付けがないこと、などが挙げられる。これらについては今後の改善が喫緊の課題であり、ボランティア派遣制度の存続に関わる問題でもある。大学、派遣校のみならず、教育委員会等も巻き込んだ体制整備が必要であると考えられる。

謝辞

今回の調査に当たり、お忙しい中ご協力をいただいた

た石狩市立小学校・中学校の先生方、石狩市教育支援センターの職員の皆様に心より感謝いたします。

文献

- 1) 大石幸二：特別支援教育の実践活動をめぐる課題—通常の学級の整備と大学生の活用—, 教育心理学年報(45), pp 155-161, 2006.
- 2) 文部科学省初等中等教育局特別支援教育課：特別支援教育関係ボランティア活用事例集, 2007.
- 3) 根津朋実：大学生による教育実習外ボランティア活動—受け入れ校の教員から見た, 教職研修(34), pp 123-126, 2006.
- 4) 宮下孝広・黛雅子・秋元有子・白石高士：学生ボランティアによる地域の学校と大学との連携の試み(第一次報告), 白百合女子大学発達臨床センター紀要(10), pp 13-20, 2007.
- 5) 野澤宏之：学校支援ボランティア学生の活用とその指導についての在り方—大学と学校・保護者との連携についての1事例—, 治療教育学研究(28), pp 49-55, 2008.
- 6) 寺田容子・秋元雅仁：特別支援教育体制における小・中学校と大学生との連携に関する考察, 障害児教育実践センター研究紀要(5・6), pp 13-24, 2008.
- 7) 黒住早紀子・前川あさ美：学生支援員への支援—特別支援教育で大学がコミュニティに提供できること—, 東京女子大学紀要論集(59), pp 147-167, 2008-09.
- 8) 山本真由美・他：特別支援教育における学生ボランティアの活用の試み, 大学教育研究ジャーナル(6), pp 102-107, 2009.
- 9) 五十嵐靖夫・紺野亜衣：特別支援教育における学校支援ボランティアについての考察, 北海道教育大学紀要(教育科学編)(61), pp 133-145, 2010.
- 10) 山本真由美：特別支援教育における学習支援ボランティア学生と派遣校教師との連絡体制について—特別支援コーディネータの立場から—, 大学教育研究ジャーナル(8), pp 113-121, 2011.
- 11) 山本真由美：特別支援教育における学習支援ボランティア学生と派遣校教師との連絡体制について—学習支援ボランティア学生の立場から—, 大学教育研究ジャーナル(9), pp 88-97, 2012.
- 12) 山本真由美：特別支援教育における学習支援ボランティア学生への学内支援体制について, 大学教育研究ジャーナル(10), pp 143-151, 2013.
- 13) 染谷新：ボランティアから見た特別支援—よりよいパートナーシップを目指して, 学校教育相談(25), pp 31-33, 2011.
- 14) 今野邦彦・橋本伸也・伊井義人：石狩市における特別支援教育学生ボランティアに関する調査研究, 藤女子大学 QOL 研究所紀要(9), pp 85-90, 2014.

Research about the student volunteer in special needs class (1)

Kunihiko KONNO

(Fuji Women's University, Faculty of Human Life Sciences,
Department of Early Childhood Care & Education)